

エルンスト・フランク：『シュティフターへの愛—詩人の人生と作品—』

Ernst Frank: Liebe zu Stifter Leben und Werke des Dichters

(翻訳)

武田 輝章
TAKEDA Teruaki

鹿児島女子短期大学

第1部「彼の人生が語る」から最初の2章を翻訳したものである。第1章の「故郷」では、13歳まで過ごした故郷オーバーブラーとボヘミアの自然や父母と祖父母の為人が、友人の書いた伝記とシュティフター自身の作品によって描かれる。母親の愛情と祖母の宗教世界に包まれて原野を駆けめぐっていた悪戯小僧が、教師の手で自然観察と音楽の世界へと導かれ、人形芝居や読書に熱中していく。幸福な少年時代は父親の死によって突如終わりを告げるが、祖父の援助で大学へと続く道が開かれる。

第2章の「クレムスミュンスター」では、修道院附属ギムナジウムの学生生活が語られる。13歳から21歳の間に、ギリシャ・ラテンの古典文学やドイツ文学に親しむとともに、詩や絵画を創作する喜びを学ぶ。ここで出会った教育者たちこそが自己陶冶の礎であったことを、シュティフター自身は次の言葉で表現する。「教育は、誰が教えるかが問題である。授業をするには何ごとかを知っていればできるが、教育をするには何ものかでなければならない。」

キーワード：故郷、ボヘミア、自然、恩師、詩作と絵画

前置きにかえて

ボヘミアの森とボヘミアの森の詩人を愛する私は、数年前、ボヘミアとオーストリアの国境地帯を訪れた。プレッケンシュタインから下ってラッケンホイザーンまで歩き、翌日はシュヴァルツェンベルクとアイゲンへと向かった。この道は、1866年初冬アーダルベルト・シュティフターが苦労の末ようやくのことで踏破した道である。空からおびただしい量の雪が森や田畑にふりそそいだその時のありさまを、詩人は『バイエルンの森から』という回想録に魅力的に書き留めている。

翌日の朝は、厳寒のすみきったあの秋の日が森の上空をおおっていたが、こんな日には田畑がくっきりとした姿を見せるため、それを目にするしあわせな旅人はほとんど疲れを感じることがないほどである。

私はベーレンシュタインに登った。この山はボヘミアと国境を接しているため、岩場からはボヘミアの森の南部がすべて見わたせた。これまで何度もこの上に立って、アーダルベルト・シュティフターの故郷をしみじみと眺めたものだ。少年アーダルベルトが青春時代を過ごし、その後、美しい作品が生まれてきたすべての場所がここから見えた。彼が生まれたオーバーブラー、恋人ファニーのもとを何度も訪れたフリードベルク、森の心臓が鼓動するのを感じたプレッケンシュタイン、ファニーの手をとって登った廃墟のヴィッティングハウゼンが見えた。この廃墟は、ファニーの話に刺激を受けて書かれた長編『ヴィーティコー』が生まれた場所である。

期待に胸をふくらませて、私は岩山の頂までよじ登った。向こう側のふもとで詩人の足跡を見失ったときはいつも、この上からもう一度アーダルベルト・シュティフターの作品を産み出したすべてを見たいと思ったものだ。

山頂に着いてみて、私は驚いた。眼下には、私の見たことのない地域が途方もない静寂の中に横たわっていた。夢ではないのだと納得するために、私は自分の心をしっかりとわが手に掴んでおかねばならなかった。現実にあったのだ。それが私にはよくわかった。ただゆっくりと、ようやく本当に事情のみこめてきた。左手にはさらにプレッケンシュタインがそびえていたし、その下には銀の帯を描いてモルダウが流れていた。しかし、川の流れが作る中心部分はもはや見えなかったし、その下には集落が、おそらくオーバーブラーがあるに相異なかったが、そこも見えなかった。集落はすっかり変わっていた。そのはるか右手には教会の塔がある。フリードベルクの教会に違いないが、家並みはどこにあるのだろうか。右手の、視界の限られたオーストリアを望む高みには、立方体のヴィッティングハウゼンがそびえていた。シュティ

フターがプレッケンシュタインからながめ、作品『喬木林』で描写した姿そのままである。

しかし山と山の間、村と村の間には、得体の知れぬ真新しい物体が大口を開けて広がっていた。ホーエンフルトの悪魔壁の上方では、新たな支配者たちが築いた人工の壁によってモルダウ川の水がせきとめられ、リプノの貯水池と呼ばれる巨大な湖が出現し、この人工の海によって大地が引き裂かれているのだ。プレッケンシュタインからオーバーブラーンまで、シュティフターが火のように酔ってさまよい歩いた道は今ももうない。オーバーブラーンからフリードベルクへ続く道、ベルトルがファニーを見つけて恋に酔った、フリードベルクへと続く小さな街道ももはや存在しない。フリードベルクからヴィーティコー一族の城、かつて人間の手で書かれた最高の国家と秩序を夢想して、シュティフターがその城へと歩いていった山道はもうない。途方もない湖がこれらの場所をひきはなしてしまった。かつてアーダルベルト・シュティフターの中で統一と節度が育っていった風景を、この深々とした湖が引き裂いてしまったのだ。

長いあいだ、私は信じようとしなかった。何度もなんども、この新奇で異質な物体を見下ろしてみた。私の脳裏に、アーダルベルト・シュティフターの満たされぬあこがれ、というイメージが浮かんできた。あの下で嬉々として手を引いてやった少女、この少女が彼のものになることは決してなかった。少女への満たされぬあこがれ、ここから彼の作品群が産み出されたのだ。つぎつぎと物語が生まれ、節度と自由の思想が成長していき、それらがシュティフターの人生と作品をつらぬいていった。この少女をめぐる果てることのない苦痛、これが『コンドル』から『ヴィーティコー』にいたる純粋な作品群を産み出したのだ、この苦痛こそがだ。

しかし、わたしは自分が見たものを信じるほかなかった。わたしの眼はこの人工の湖にまつわるイメージをふり捨てて、空を見上げるしかなかった。はかりしれない純粋さと青さに輝く空からは、太陽の光が幾すじとなく地上へとふりそそいでいた。

第1章 彼の人生が語る

故郷 (1805年～1818年)

「アーダルベルト・シュティフターは、1805年10月23日、ボヘミアの小村オーバーブラーンに生まれた。この町は、近隣の周辺地域と同様ドイツ人だけが居住しているとはいえ、ボヘミアの森の北斜面に位置するクルマウからは、西へ四時間という距離にある。尾根が長くのびたボヘミアの森は、幅が広くて快適な暗さの帯状の森で、シュティフターの作品では、感動的ともいべき敬虔さで繰り返しくりかえし回帰してくる場所である。」友人のヨハネス・アプレントは、シュティフターの活動を広範囲に描写した最初の人物だが、こういうことばで詩人の伝記を書き出している。シュティフター自身は、作品『森を行く人』で、生まれた土地の歴史について次のように書いている。「北側には、畑や森でおおわれたごく小さな丘がいくつもある。昔は見通しがきかないひとまとまりの森の奥であったが、さらに北部になると土地の丘陵の形は消えてゆく。それとともにドイツの風俗や流儀、ドイツの服装やドイツ語そのものが消え去ってゆき、平原がはじまると今度はスラブのことばとスラブの衣服へと移っていく。かつての太古時代、ゲルマン民族が荒波のように西へ流れ出し、後方に住んでいた者たちがその見捨てられた跡地へゆっくりと進んできた時代に、一部のゲルマン部族だけが、ひとり狩をするために好んで森に住みつき、森の中に居残ったままで現在に至ったのかもしれない。あとから来た者たちが、彼らの後を追って森の中へ入らなかつたのはその必要性がなかつたためだろう。こうして、彼らは今なおそこに留まっているのだ。ただ、彼らはまわりの森を伐採して丘と谷をむき出しにしてしまい、森が一番高い部分や国境地帯にまで後退していった。彼らはもはや狩をせず、今では畑を耕して暮らしを立てている。」今日では、畑を耕す人たちすらもここには住んでいない。

アロイス・ライムント・ハインは、アプレント以後、アーダルベルト・シュティフターの最も詳しい伝記を書いた人だが、彼の手元に、シュティフターの青春時代の手書き原稿が残っている。その原稿にはこのように記されている。「かつての住人たちは、何百万年と経過するうちに次第しだいに逆戻りをしてゆく。そして最終的に彼らは、すべてを見わたして導いていくひとりの人間の記憶の中に存在するばかりである。」— それにしても、この世の人のつながりとはいったい何であろうか。

この地方には、数百年前からシュティフター (Stifter) およびシュテュフター (Stüffter) という名前の人間が住みついていた。詩人の示す系図には、市民で職工のアンドレアス・シュテュフターという記録があり、この人はオーバーブラーンで1605年に生まれ1684年に亡くなっている。これが詩人の直接の先祖にあたる。記録では、この人のひ孫のひ孫がアウグスティン・シュティフターで、これが詩人の祖父である。この祖父は、1744年8月28日にオーバーブラーンで生まれ、

1834年1月22日に同地で死んだ。数百年前からここで生き、ここで愛し、ここで働いたドイツ人たちが本当にいたのだ。そのわれわれの中庭へ突如としてよそ者が座り込むとは、一体どんな権利があるというのか。

アーダルベルト・シュティフターは、自分の素性を何度も誇らしく確認している。回想録を書きはじめたのは人生が終わるころになってからだが、その中で彼は最も幼い記憶の第一印象として、自分の存在の中に残る音の響きが「民族の原初記憶のような」感じを抱かせる音であると語っている。そして、この音とならんで出てくるのが、母であり、森であり、父であり、祖父と祖母であり、おばである。穀物の茎であり、大きな梁のある居間であり、復活祭を祝った机であり、最初の記憶の中に出てくる窓の台である。この窓から、彼はいつもただ夏の光を見つめていた。ここから、彼の人生を描く作品群が生み出されていった。これらの人物のことが小説や手紙の中で多く語られることになった。

村々をまわって品物を行商する瀝青炭焼きが、羽目をはずして、シュティフター少年の足裏に車軸油を塗ったことがある。ぴかぴかに磨きあげた床をこの足でよごしてしまった少年が、母親からひどい罰を与えられたとき、彼を助けてくれたのは祖父の 아우グスティン である。祖父は少年の手を取り、彼をつれて畑を越えて歩きながら、南ボヘミアのベスト時代の話をしてやる。この出来事と祖父への感謝にみちた描写が出てくるのは、小説『みかげ石』である。祖母ウルズラ・カリの思い出は、小説『高原の村』で述べられている。「祖母は、少年に聖書のお話を語って聞かせた。日曜日の午後には、よくニワトコの灌木にしゃがみこんで聞いていたものだ。— 奇蹟が起こり、主人公たちが登場し、恐ろしい戦いは始まり、神の裁きが下される。— 祖母は話しているうちに感激してしまうが、少年は古代精神の力強さのために気を失うようなことはない。そうかと思えば、こんどは祖母の話は自分の青春時代にもどり、しわだらけの口で愛情をこめて夢中になって語りはじめる。ふだんは見たこともない様子で、意味はわからないものの、感動的で本能的なことばで語られる。祖母は、物語のすべての主人公たちを自分のまわりに寄せ集め、身内の亡くなった者たちをも取り混ぜて、すべてをごちゃごちゃにして語る。少年は内心気味が悪くなるほどで、祖母の話が理解できないときはなおさらだった。しかし、彼は魂のすべての門を大きく開けて、この空想的な遠征軍を迎え入れたのであった。」祖母のお話を自分のものとして聞いた彼は、機会をかえてはそれを拡大したり作りなおしたりして話してきかせた。あるとき、祖母の知り合いの女性にこの聖書のお話をしたとき、彼女はこう叫んだ。「ウルズラったら、この子の口から話をしているのは精霊そのものよ。」ある手紙の中でシュティフターは、祖母は「生きた年代記であり文学だった」と書いている。

詩人が心から愛情を感じていたのは、母親である。母のマグダレーナ婦人は、旧姓をフリーペスと叫ぶが、その両親も祖先も三十年戦争の前までには同じオーバープラーンに住みついてきたことが証明されている。彼はいくつもの手紙の中で母のことを語っている。「母は愛情の尽きない深い湖であり、心の太陽光線を私のいくつもの作品に投げかけているのです。」そして、「私は母を、ひとりの母としてだけではなく、稀有な人間として愛し敬っていました。だからこそ、実際、わたしの最初の習作は母に捧げられました。私の努力のすべてと私に生じた良きことのすべてが、母と母の喜びに結びついていたので。」先にふれた人生の回想録において、シュティフターはごく小さな子どものとき、窓ガラスを割ったことを書いているが、母はそのために彼に対して返事をしなかったことがあった。母からことばが帰ってこないことは、彼には何か途方もないことであり、<彼の魂にのしかかったまま>の重しであった。すでに述べた『みかげ石』の中では、少年アーダルベルトは、床板をよごしたため母に罰を与えられたあと、空が白みかかる中でようやく許してもらったのを感じて眠りにつくことができたのであった。「母の無尽蔵の素晴らしさをあなたが知ることであれば」と、別のおりに彼は書いている。「あなたは私を祝福されるであります。」

シュティフターが父を失ったのは十二歳と早かった。父については「気高いが気前がよすぎる人」と述べている。小さな農場に従事するかたわら、父は亜麻布を織る熟練工として亜麻糸屋を営んでいた。いくらか書物ももっており、読書好きでよく本の中でくらす。父はアーダルベルトを何回か商用旅行に連れていってくれた。

さらに、六人の兄弟姉妹がアーダルベルトにはあった。彼のあとにはマリアンネが生まれたが、生まれたその日に亡くなった。つぎにもうひとりの妹アンナ・マリーアが、それから三人の弟たちアントーン、ヨーハン、マルティーンが生まれた。1817年に父が死んだ後、母マグダレーナは1820年にパン職人のフェルディナント・マイヤーと再婚し、1829年に弟ヤーコブを生んだ。すべての兄弟姉妹がシュティフターより何年も長生きをした。

彼は戸外で動き回るのが何より好きな子どもだった。探求心にみちた彼の眼は何ものも見のがさなかった。夏は一日中、家に帰るのはただ食事をするときだけで、それ以外は何時間も戸外をとびまわった。ひとりで、あるいはほかの子どもたちと一緒に、後には七歳年下の弟アントーンと歩いた。若枝の筥、灌木の林、花々、岩石など、地上にあるすべてが彼を楽しませた。五感で感じるすべてのものに大きな喜びを覚えた。学校へ上がる前にはすでに赤鉛筆で鹿、騎手、犬、花を描いたし、特に街並みを好んで描いた。また、湿った粘土で宮殿を作り木の皮で祭壇と教会を作った。

学校に入ると、担任のヨーゼフ・イェンネにすぐれた教育者を見いだすという幸運を得た。彼を通して、シュティフターの自然への愛情ははじめて方向性をもち、安定した軌道へと導かれた。彼から貸りた書物によって自然観察の熱意が制御され、彼から求められた音楽的要求のおかげで、ヴァイオリンとクラリネット演奏を完全に習得した。しかし、少年の心を満たしたものは何よりも歌うことであった。イェンネが指揮をした生徒の合唱団で、彼はハイドンの『天地創造』の演奏会に出ることが許された。この作品の神々しいメロディーにすっかりとりこになった彼は、生涯これを最も荘厳な交響詩として尊重した。

彼の活発な精神は、すでにこの年齢で芝居の上演にも向けられた。『曲がった手』という名の操り人形使いが、たびたびオーバープランに立ち寄って聴衆をひどく熱狂させた。「あのころのおとぎ話の世界に匹敵するものは、もはや何も存在しない」とシュティフターは、後年友人ハインリッヒ・ライツェンベックに語っている。このように報告している友人の伝記的小品は、シュティフターについて残された最初の人生報告である。シュティフターは、見てきた人形劇を自宅でありありと話してきかせ、母と祖母の前ではさらに空で覚えたせりふを演じてみせるのであった。

この人形芝居は、少年の読書熱をいっそう駆り立てた。彼はこっそり父親の書物へ手をのばし、父の知らないうちにむさぼり読むのであった。あるとき鳩小屋の中で読んでいて服をよごし、興奮のあまり泣きながら父のいるところへもどってひどく叱られた。あげくの果ては、罰としてひざまづかされて夕食ぬきで眠るほかなかったこともあった。

これらの日々の小さな逸話からは、さらに別の特徴も見えてくる。アーダルベルトはある日、作男が暖炉のベンチで眠りこけているのを見つけた。足をひもでベンチにむすびつけておいて、彼はいきなり大声をはりあげた。いびきをかいていた男は、仰天して起き上がろうとして、背中からもどりうって床にひっくり返ってしまった。うまくいったのを見て、このいたずら小僧は王様のように喜んだのであった。

もっとひどい目にあったのは猫で、彼は猫をパン焼き窯の中に閉じ込めてしまった。母が火をかきたてたため、死の恐怖で猫が騒いで音をたてはじめたとき、オープンの中でパンが生きて動き出したと思い込んだ母と祖母は、あらゆる聖人の名をあげて祈るのであった。この一件がどう落ち着いたかは伝わっていない。

これとは異なるいたずらで、学校で違反行為をおかしたアーダルベルトが、それを認める勇気をもてずに恥ずかしい思いをしたという話が伝わっている。同級生の女の子の手からバターパンをたたき落としたため、彼の行為は担任のイェンネに訴えられた。自分の行為を否定したシュティフターの顔色を見て、嘘を見ぬいた教師は彼の態度を面とむかってたどした。失望を口にして、お前は何という臆病者だと彼は言った。アーダルベルトは、嘘をついたという恥ずかしい思いと賢い教師への驚きを、長い間忘れることができなかった。

元来、この少年の勇気にはいくぶん独特な面があった。アーダルベルトは雷雨や幽霊をこわがったものの、祈祷の鐘つきにはみずから進んで名のりをあげた。そのつど大胆に教会の塔によじ登って、いつも勇敢に大鐘の綱を引いた。しかし、大鐘がうる音にくわえて小鐘の響きが重なってひとつになったとたん、恐怖心におそわれ、不安になってあわてて鐘つきを投げ出すのであった。

こうした幸福な青春時代のまっただなかへ矢のように打ち込まれたのが、父親の突然の死の知らせであった。父ヨーハン・シュティフターは、この日もまた馬車でオーバーエーステライヒへと外出していた。1817年、たちまち暮れてゆく11月の夕方、父は転倒した馬車の下敷きになり馬車の重みで圧死したのである。この事故で一家は困難な事態におちいり、今までよりいっそうの儉約を強いられた。アーダルベルトの将来は、完全に不確かな状況に至ったものと思われた。母の嘆きと困惑ぶりは、飢え死にするしかないのだとアーダルベルトが思い込むほどであった。この不幸な事件がどれほど深く少年の心をとらえたかは、『石灰石』でも『晩夏』でも、この事故が小説の主人公たちの行く末に持続的に影響した事件として語られているのを見ればよくわかる。

実際、少年はこれまで以上に厳しい生活を強いられるようになる。原野と森の中で夢みていた少年の世界は過ぎ去ってしまった。十三歳の少年は、祖父アウグスティンのそばでわずかばかりの農地の手入れを手伝い、鋤やまぐわを使って耕したり草刈りをしたりするなど、多くの容易ならぬ仕事を学ばねばなくなる。

父の早世の結果、たぶんできなくなるだろうと恐れていたことが、それにもかかわらず失われずに残った。すなわち、父が亡くなっても彼は大学へ通えることになるのである。少年の教育については、これまでもすでに一度、疑問視されるべきことが起こっていた。教師のイェンネは、アーダルベルトのすぐれた才能を十分認識し、両親にもっとよい教育を受けさせるよう勧めていた。そこで両親は少年を教区の助任司祭の手にゆだねた。司祭はラテン語の基礎を教えることになったが、この聖職者は教師の意見に賛成できなかった。「ベルトルには」、アーダルベルトは家庭や学校でこう呼ばれていたが、「まったく才能がないのだからしかたがない」と彼は言った。そこへ父の死が出来たわけで、ベルトルには農

夫になる道しか残されていなかったのである。

このとき、もうひとりの祖父が自分の血統への信頼を主張してくれた。「都市に住む肉屋のフランツ・フリーペス」、すなわち母マグダレーナの父には、ベルトルに才能がないとは思えなかったのである。父親が死んで一年後、祖父は死んだ義理の息子にかわって、行き詰った未回収金支払いの取り立てにオーバーエステライヒへやってきた。そのとき、彼は孫の教育を自分にまかせるようにと娘に伝えた。「こいつは鳥のように目ざとい子だ。わずかばかりのラテン語が覚えられないなど、わしには信じられん。」彼は孫をつれて別の司祭のところへ行き、その司祭にクレムスミュンスター修道院附属ギムナージウムへの推薦書を書いてもらった。こうして二人はプラーツィドス・ハル神父のもとへたどり着いたのであったが、この神父は、少年にこの世に存在しうる最も美しい心の入学試験をやってくれた。神父は少年にたずねた。「どこからやって来たかね。」それから、「オーバープラーン周辺の村々は何という名かな。」これらの間に申し分のない答えがなされたあと、少年の住む地域に生えている木々や灌木についてたずねられ、家のそばの木々や流れている川について聞かれた。これらすべてについて、ベルトルは実によく知っていた。このあともさらに打ち解けた雰囲気が続く。宿屋の主人や肉屋は何という名か、彼らは馬や犬を飼っているか、それらが何と呼ばれているか、教師が聞いたのはこんなことであった。ベルトルはそれらについて語り、教師が知りたがった以上のことを答えた。その結果、司祭は話を打ち切ってこう言わねばならなかった。「結構です、フリーペスさん。万聖節の日にこの子を連れてきてください。」当時、オーストリアのギムナージウムは万聖節の日か万霊節の日にはじまったのである。

祖父フリーペス自身は、この件について話を通じたのかどうか自信がもてず、言い忘れていたかもしれない点を教師に思い出させねばと思ひ、「ぜひともラテン語をお願いします、先生様」と言った。「よろしい。この子は何もできない、あなたはきっとこうおっしゃりたいんですね。しかし、きつとうまくいくでしょう。ぜひこの少年をよこしてください。」これが教師の答えであった。

そして、実際この通りになった。すぐれた教師である司祭のプラーツィドゥス・ハルが質問によって確認していたことは、アーダルベルト・シュティフターの作品中で、その後簡潔な文章で述べられることになる。ここには、すべての教育の究極の根拠が含まれている。「教育は、誰が教えるかが問題である。授業をするには、何ごとかを知っているだけでよい。教育をするには、何ものかであればならない。」

クレムスミュンスター（1818年～1826年）

当時、クレムスミュンスターの学年は11月3日にはじまった。そのため、9月14日には学年が終了した。秋季休暇の時期が今より遅かったのである。クリスマス休暇はクリスマスから新年まで続いた。それ以外に、謝肉祭には三日の休みがあり、復活祭は前の水曜日から復活祭後の火曜日まで休みであった。授業は日におよそ四時間、午前二時間午後二時間であった。木曜日はまったくの休みで、火曜日は午後から休みだった。修道院長は同時にギムナージウム校長でもあった。校長は当然ながら学校の最高管理だけに専念すればよかったため、学校の実際的な指導は学部長のつとめであった。学校は八年間通わねばならず、下級ギムナージウムと上級ギムナージウムにわかれていた。最初の四学年が文法クラス、上級の四学年が哲学クラスあるいは人文クラスと呼ばれた。五年目からは、いまなおラテン語で授業が行われていた。

1818年10月末、シュティフターがはじめて、かなりの年月の予定で両親の家を出たのは十三歳のときであった。つまり、すでに十歳か十一歳でギムナージウムの席をあたためはじめ多くの同級生よりいくぶん年長だった。農家の仕事を二年間経験していたため、身体もきたえられて頑丈だったとみてよい。しかし、彼の性質と森に囲まれた環境によって精神的にはいくらかのんびりと育っていたため、大器晩成型の人間だったと想定できる。最初のころはホームシックに悩んだこと、引っ込み思案で恥ずかしがり屋でぶきつちよだったこと、質素な身なりのため表舞台に出ることを好まなかったこと、シュティフターについて伝えられているこれらのことは、この想定と一致している。しかし、やがて彼の自然な才能が勝利をおさめることになる。少なくとも潜在意識の中では、精神的成長の機会が到来したことを十二分に把握していた。故郷ポヘミアの森という自然からさらに広くて偉大な文明世界へ、すなわち修道院文化へと移行していくのを理解していた。純粋に風景上の変化だけでも、この一步はすぐさま見てとることができた。オーバープラーンでは森が支配していたし、山々がまぢかにせまり、建物はとても小さかった。クレムスミュンスターの風景はもっと広大で、庭園や田畠も多かったし、アルプスの山々は遠く離れて高くそびえていた。教師イェンネの勤める校舎と比べると修道院はお城そのものだった。修道院の建設者は景観上の位置をみごとに利用していた。クレムス谷の上にそびえ立つ姿は修道院を超えていた。それは防壁であり、本物の城であった。はじめて見たとき、少年シュティフターはこの素晴らしい建造物に驚き衝撃をうけた

ようである。人間も故郷の者たちとは違っていた。母と祖母たち、祖父たちと教師のイェンネは善良な人たちだった。彼らは愛そのものであった。しかし、新たな環境は愛情と善意だけではなく、それらを超え出た何ものかを隠しもっていた。プラーツィドス・ハルの入学試験を受けているときから、その予感はずでにあつた。プラーツィドス・ハルの眼の中には、気持ちをそそり心を燃え上がらせるものが光っていた。ここにはそういう男たちが大勢いた。彼はやがて熱心に教師たちと交流することになる。

四学年の文法クラスでは、ラテン語、哲学、宗教、数学、博物学、物理学、地理学、歴史学が教えられた。小学校からドイツ語に習熟していることは大前提であった。そして、プラーツィドス・ハルがドイツ語をどういう意味で使っているかは、彼がシュティフターと最初に逢ったときの様子をみればわかる。教師のハルは、オーバープラーンからそれほど遠くない南ボヘミアのカプリッツ出身だった。しかし、ここはもはやボヘミアの森ではなくすでに国境地帯に属していた。彼の父は教師でパイプオルガン奏者、母は郵便局長の娘だった。この夫婦の息子はアントーンという名で、プラハ、リンツ、ヴェルスの大学で学んだ。重い病気をわずらった際に誓いをたて、その誓約に従って、修道士としてクレムスマンスタール修道院に入り、そこで彼は1805年に司祭となり、プラーツィドス神父と呼ばれた。彼は著名なラテン語教師となった。さらに1809年の戦争中には、一時タールハイムの司祭館を受けもたねばならなかったが、修道院にこそ相応しい人物であるということをもそのとき立証した。フランス軍が侵攻してきたとき、彼は身の危険をおかしてオーストリアの捕虜を解放し、敵のはげしい銃弾の中、壊れたトラウン橋を越えて捕虜を誘導した。この行為の功績として、また卓越した教育的活動のゆえに、彼は黄金功労賞を受賞した。

ベルトルは四年間この教師の心と結びついていた。そして、この結びつきの中からシュティフターの性格が、すなわち、他人への愛情と自己への厳しさを忘れず、生涯にわたって多くのものを克服してきた彼の性格が生まれたのである。シュティフターは生涯この男を慕った。彼についてはこう書いている。「私の進歩のすべてとは言わないがその最も優れた部分は、私を世話してくれた文法クラスの先生、ベネディクト会修道士プラーツィドス・ハル先生のおかげである。先生は私の中にいくらかの才能を見つけようと考えてくれ、他の生徒たちともども私を自分のふたつの部屋へ招いて励ましてくれた。活発すぎる性格のために我を忘れたときには、手綱をしめて監督してくれた。とても私に好意をもって来て、結局のところ、ほとんど父親以上に私の面倒を見てくれた。とりわけ先生が愛した誠実、正義、快活、これらの最も美しい感情は先生からもたらされたものである。」『貧しい慈善家』、この物語は後に『石灰石』として『石さまさま』におさめられたが、ここに見られる筆遣いの多くはプラーツィドス・ハルに敬意を表したものだと言ってよい。

人文クラスでもシュティフターは幸運であった。ここでは、彼を文学の宝庫に夢中にさせることを心得ていたイグナス・ライシュル神父が担当であった。この先生の手ほどきで、生徒たちはギリシャとラテンの精神世界に、そしてまたドイツ文学の精神世界に親しんだ。彼らはゲーテとシラーに親しみ、敬意をはらった。また、生徒自らも詩人となり詩作するように指導された。というのも、当時はまだ詩作が文体練習の重要な補助手段であり、それによって性格を強める手助けになるとみなされていた。シュティフターの芸術観の基本はこの教師の教えに由来しているが、彼はそれを多くの作品や書簡の中でくりかえし言葉にしている。「美は魅力という衣装をまとった神にほかならない。」彼のもとで、シュティフターは詩作することを学んだ。「夕方、ひとりで丘の果樹の下に座っていると、明るくやさしいバラ色のかすかな光が山をこえて流れていった。あのころ私は何と多くの詩をひそかに書いたことだろう」と、この時代を回想している。ここに書かれたものの中に、われわれの眼にとまる詩が多く含まれているわけではない。これらの詩には、郷愁、友情、芸術、知的活力、そしておそらくすでに恋愛感情でいっぱいになった、けがれを知らない少年の姿が表現されている。

素描においても、シュティフターはクレムスマンスタールで強力な援助と基礎づけをしてもらった。今の時代でいえば、素描は副専攻として教えられたところだろうが、シュティフターにとっては、やがて素描が一番好きな専攻になったのはまちがいない。先生の名前はゲオルク・リーツルマイルというが、この先生が正式のデッサンと絵画の初歩を仕込んでくれた。その教えによって絵が好きになり、この生徒には一生の宝物となったのである。残っている最初の絵画は1823年のものだが、絵画の多くは失われてしまった。リーツルマイルはシュティフターの鉛筆と筆遣いの才能を認めていた。アプレントの語るところによれば、この教師は生徒のシュティフターにくりかえし木だけを描かせ、そうしたあとでやっとならぬと他の生徒と同じように風景も描くようにと指導し、次のような言葉でその理由を伝えたという。「君は役に立つことを学ばなければならない。ほかの連中のやることに気を散らしてはいけない。彼らはやりたいことをやるがいい。しょせんは何ものにもなりはしないのだから。」文学的名声をえた年配になってもなお、シュティフターは絵描きになるために生まれてきたと信じていた。彼がいかに絵に惹かれていたかは、『ユーリウス』から『子孫たち』に至る多くの小説にはっきりと出ている。頼めば修道院の絵画コレクションを見せてもらえたのだが、『晩夏』には、美術と絵画を信奉するとい

う明確な告白が出てくるし、さらにはここを訪れた思い出も描かれている。

シュティフターは、クレムスマュンスターは居心地がいいと感じていた。できのよい生徒であったため、彼は四人かそれ以上の級友たちとともに修道院長官マイヤーの家に住み込んでいた。長官の家族には、少年たちが不正なことをやり過ぎないように監督する責任もあった。大人の付き添いがなければ、料理屋やコーヒー店を訪れたり観劇をしたりすることは許されなかった。しかし、これらが禁じられていたからこそシュティフターにとっても刺激的に思われたのだろう。彼は長官の図書館所蔵の書籍をすべて読んだし、当時クレムスマュンスターにあった小劇場をも訪れたようである。彼は友人の勉強を助けていたが、その家で演じられた芝居では、みずから『先祖』のヤロミルの役と『ドン・カルロス』のフィリップ王の役を演じた。役者としての才能についていえば、彼の友人たちの批評はかんばしいものとはいえなかったらしい。

しかしこれ以外の点では、彼は単なる優等生であるだけでなく、魅力的な若者であったことはまちがいない。脚韻をふむ自作の詩を書くという宿題がまたしても出されたとき、その翌朝彼のもとへやって来た同級生のトレーガーは、「俺はやっていないだ」と言って、ヤンプスをすばやく書いてくれるように頼んだ。「そんなに簡単に詩ができると思っているのか」とシュティフターが聞くと、「君ならできるさ」とトレーガーはお世辞を言った。「ささっと書いてくれよ。一時間目は宗教の時間だから、そのときに俺はベンチの下で詩をすばやく書き写すから。」シュティフターは断れなかった。早朝ミサのあいだに、タベ何時間も推敲した宿題の詩を紙に書きとめ、すばやく書きなぐられたその詩をトレーガーが清書した。ライシュル先生は、ノートを集めて翌日みんなに返却しながら発表する。「一番よくできていたのは、シュティフター君ではなかった。今日は、トレーガー君だ。シュティフター君はいささか技巧を凝らしすぎたようだな。」—こう言われて、生徒たちはどう思っただろうか。その時間の終わりにライシュル先生は二人のいたずら者を教室に残して、それとなく指導した。「さあトレーガー、今日はお前が一番だ。」そして、間をおいてこう言った。「やってはいけないことだぞ。正しいことではない。今回は棚上げにしてやる。どっちみち、ほかの連中にもみんなわかっていることだ。さあ、行きなさい。」

単に授業をするだけの教師ではなく、教育をする教師というものは、生徒の業績に報いる別の手段をも持っている。シュティフターのクラスでは週ごとに席の入れ替えがあった。シュティフターはいつも一番の席だった。それでも勉強に誤りが紛れこみ後ろの席へ移らざるをえなくなったとき、教師は一日か二日入れ替えるのを忘れることもあった。席替えとなれば、主席のシュティフターは、一日だけでも、それ以外はいつも力で勝ち取った一番の席とは別の席に座らねばならなかった。主席の彼は、こうしたことが二度と起こらないように気を配った。

優等生だという名声は、休暇中の自宅にまでついてまわった。主席の生徒たちには、優秀な成績表とならんで高価な本も与えられた。最初の学年終了後、シュティフターが誇りに胸ふくらませて帰省したとき、プラーツィドス神父のもとへ送り出してくれた祖父フリーベスに、畑でばったり遭った。ベルトルは、一年の間によその土地ですっかり変わったのだから、祖父には見分けられないだろうと思っていた。それで「ちょっと待っておれ。そうすればお前と一緒に家へ帰れるから」と、祖父に呼びかけられたときはすっかり驚いた。家で成績表と褒美の書籍を見た祖父は、これらをもって家々を見せまわった。

二年目の年から、シュティフターは友人たちや下級生たちに補習授業をすることが認められた。それによって、彼は生活費の一部を早くも自分で稼ぎ、母親の負担を大いに軽減することができた。四ヵ年の文法クラスの間シュティフターはずっと主席を通し、いつも成績表と一緒に褒美の書籍をもらった。人文クラスでもシュティフターが二番になったのは一回だけである。宗教の時間は別の生徒が彼より前にいたから、この点では決して点取り虫とは言えなかった。

彼はみんなから仲間としても尊重された。彼は精神上的業績とならんで、当然のごとく身体的業績をも重視した。遠くまで足をのぼす大規模な徒歩旅行をやったが、それも休暇をすべて使う旅行がしばしばであった。そうなることが多かったのは、母のもとへ帰省するときも学校へ戻るときもたいてい徒歩で行くほかなかったからである。彼は、ホーエンプリールや死の山脈といった近場のアルプスにも親しんだ。

彼は山登りを好み、選手のように泳ぎフェンシングをした。このような彼であったから、次のように仮定してもその推論はおそらく正しいだろう。すなわち、いくつかの小説中に熱狂的な水泳の描写があるのを見れば、また『晩夏』の中でドレンドルフ兄弟が子どものころ父親から体操器具を使用するように勧められたという報告を見れば、彼がグーツムーツの著書とフリードリヒ・ヤーンの著書を知っていたことがわかると言ってよいだろう。

後年、シュティフターはクレムスマュンスターで過ごした時代を人生最良の日々と呼んだ。事実、祝福された年月であったことは間違いない。なぜなら、利発な少年時代と青年時代を過ごした、このクレムスマュンスターにおいて、彼のあら

ゆる善と美の基礎がかためられたからであり、その後、著作の中でこの善と美がシュティフターの世界を表現することになったからである。

注

翻訳はドイツ語版の以下の部分である。

Ernst Frank: Liebe zu Stifter Leben und Werke des Dichters

Adam Kraft Verlag, Augsburg, 1968

(1) ANSTELLE EINER VORREDE S. 5-S.7

(2) 1. Teil SEIN LBEN ERZÄHLT HEIMAT (1805-1818) S. 8-S.18

(3) 1. Teil KREMSMÜNSTER (1818-1826) S.18-S.26

(2013年12月2日 受理)